『今昔物語集』における「清気」小考
—中世法制史研究のための基礎作業として—

清　田　善　樹

The usage of "Kiyoge" in"KONJAKU-MONOGATARISYU"

Yoshiki kiyota

Abstract

A Japanese word "Kiyoge" is originally used as a word which means pure or clean state of things. But in "KONJAKU-MONOGATARISYU" -narratives that were edited in 12 century -the word "Kiyoge" was used in various means. It was often used to express the condition of foods, paper, furniture. And it was used against even a young man or a young woman.

In this paper I tryed to make clean the meaning of "Kiyoge" in the case when it was used to express the state of foods.

KIYOGE KIYOI KEGARE

Received Sept. 29, 1995

は　じ　め　に

『今昔物語集』を読んでいて，ある表現に引きつけられた。それは平安時代，12世紀前半に成立した説話集である『今昔物語集』において，住居や食物，人物特に女性，さらには机等物品のある種の状態を形容する際に，「浄げ」「清げ」「清し」という言葉を用いることである。

たとえば，夕暮れ方に道を歩いていた男が，とある家の前を通りかかったところ，中にいた女に呼び止められたので，呼ばれるままにその家の中に入っていった。男を呼び止めたその屋の主の女は大した美人であったらしいが，『今昔物語集』では「清気ナル女ノ，形愛敬付

タル年廿余計ナル」と表現されている[1]。ところが，そのすぐ後では，「清気」なる女が男のために取り寄せた夕食は，「糸清気ナル食物ヲ，銀ノ器共ニ為居へ」たものであったと記されているのてある。美人と食い物という，一見何の共通点もないように見える二つのものの双方に「清気」の一語を用いているのである。そして，細かい点にこだわらなければ，女と食い物の好ましい印象を表現する言葉として「清気」が用いられているらしいのである。

食べ物について表現するのならば，普通は「旨い」とか「不味い」のどちらかを用いるのではないか。女性についてならば，「美しい」か「醜い」であろう。後述するように，日本の中世法史研究においては，「清い」の反対語である「穢れ」はしばし問題とされている。「穢れ」の問題を考えるために，その反対語である「清い」のもつ意味内容を考えておくことは必ずしも無駄な作業ではないと考えるので，『今昔物語集』における「清げ」のもつ意味について検討してみようと思う。

一　国文学から見た「清げ」

先にあげた例における「清気」という語には，現代の用語では「美味しい」「美味しそうだ」「美しい」「美人だ」というのに近い意味があるように見えた。はたしてそう解釈しうるものなのだろうか。

日本古典文学大系版『今昔物語集』五の補注においては，「清げ」についての用例をすべて紹介した後，以下の如き解説文を付している。[2]

> 以上見る如く，男ならば廿から卅までの容貌端正なる者について，心持ちも麗しく，財産も有って頼もしく見える者の形容に用いられる。僧についても転用せられ，未成年の幼童についてもいわれることもあるが，その場合は，もう眉目秀麗の意に限定せるものであろう。女ならば十七八から二十歳くらいの美女を指して用いられ，男を惹きつける力十分ある場合に用いられる。（中略）この表現は恐らく天竺・震旦部に屢々用いられた彼の「端正美麗」に相当する役割を各節話において果たしているのではないかと思われる。
>
> 但し，前者と異なる点は，理想的と考えられるものならば，「清げ」が食物でも家の構えでも調度でも構わず，あらゆるものに適用される点，その用法の非常に広範囲に亘ることであろう。

さらに，食物に対して「清げ」と形容される点については，その用例を検討した上で，

> 大袈裟に云えば「贅を尽くした」，簡単にいうならば，「結構な」に当たり，具体的に，品数を形の如く備えた食事，粗末ならざる食事を意味するものであろう。

と述べている。すなわち，食事について「清げ」というときは，食物の味わいや清潔感などをいうのではなくして，視覚的な豪華さを意味するというのである。

住居や調度，紙，衣服などに対して用いられる「清げ」については，「一言以て之を蔽えば，『穢気無キ』に通じ」と述べている。そして，以上を総合して，「清げ」という言葉は，

単に「綺麗」とか「立破」とかの義に解することは，全くの誤りではないにしても通り一遍の皮相的な見解に過ぎざるべく，説話の場面・文脈に副うた語解としては，須く，一点の非の打ち所のない，とか，申し分のない，理想的な，という如き気持ちを幾分容れたものに改めねばならぬ

と結論づけたのである。

如上の説明は，究めて説得的である。この説に従って『今昔物語集』の各説話を読むと，確かに文意が理解しやすくなる。「申し分のない」「理想的な」女性というのも魅力的ではある。従って，文学作品を文学的に鑑賞しようとするのであれば，上記の説明で十分であろう。しかし，歴史学の立場から「気げ」についてみるならば，もう少しこれに付加できるように思われるのである。

古典文学大系の補注の筆者も指摘しているように，「一言て之を蔽えば，『穢気無キ』に通じ」というのであるなら，「穢無キ」と関連づけて考える余地があるのではないかと思うのである。

中世における犯罪とそれに対して科される刑罰との関係について，犯罪によって引き起こされた穢を浄化するという，「穢」と「浄化」（祓え）の観点から考えようとする説がある。(3) このような観点から中世法について考えようとすると，どうしても犯罪によって穢された状態の方に関心が向きがちで，穢さる前の状態，すなわち清浄な状態や，「祓え」によって浄化された状態とはいったいいか如何なるものなのか，という点についてはあまり関心が払われてこなかったのではなかろうか。

もちろん，穢が生ずる前の状態といっても，普通は取り立てて清浄無垢な状態にあるわけてはなくて，ただ単に「穢てはいない」というにすぎないのであろう。そういっても，中世人が「清い」というときは，話し手も聞き手もともに「清い」という言葉について，何らかの共通した認識を持っていたからこそ対話が成立していたのであろう。したがって，中世における穢の問題について考察するに当たって，「清い」とはどのような意味なのかについて考えてみることは，必ずしも無意味なことではない思うので，以下に『今昔物語集』における「清げ」の用例を検討しながらこの問題について考えてみようと思う。

二　食物にたいして用いる「清げ」

食物のある状態を表現するのに「清げ」という語が用いられる例として，『今昔物語集』巻二十九の第三話「不被知女盗人語」と，同巻第三十一話「北山狗人為妻語」の二つの説話を取り上げる。

「不被知女盗人語」では，「侍メキタル男二人，女房メキタル女一人，下衆女を具シテ，糸清気ナル食物ヲ，銀ノ器共ニ為居ヘテ，女ニモ男ニモ食セタリ」と記す。

往来を歩いていた男を家に呼び入れた女が，男に与えた食事は，銀製の食器に盛られてい

て，それだけでも豪華な印象を読者に与える。が，「糸清気」は食器を含めているのではなくして，食器の上に盛られた食物そのものを形容しているのである。前に紹介した『今昔物語集』の補注では，「大袈裟に云えば『贅を尽くした』，簡単にいうならば，『結構な』に当たり，具体的には，品数を形の如く備えた食事，粗末ならざる食事を意味するものであろう」と食物に対して用いられる「清気」の意味を解している。この解釈でも不都合はないように感じられるが，この説話のこの場面においては，もう少し異なった要素を付加しなければならないようにも思われる。

次に，「北山狗人為妻語」について検討してみよう。この説話は，京都の北山へ遊びに行った若者が，道に迷ってしまい途方に暮れていたところ，谷のはざまに人が住んでいるらしい小さな庵を見つけたところから始まる。

外に人の気配を感じて，様子を見に柴の庵から出てきたのは，「年は廿余歳許ニテ糸浄気ナル」「若キ女」であった。彼女はもともと京に住む人の娘であったが，異類(実は大きな白犬)にさらわれてこの深山に連れてこられ，そのものの妻にされていたのであった。この女性は，若者のたっての頼みに，若者を自分の兄ということにして白犬を言いくるめて一夜泊めてやることにしかたのである。女が，若者に与えた食事は，「食物イト浄気ニシテ」と表現されている。

ここで用いられている「浄気」な食事も「結構な」とか「贅を尽くした」という意味に解釈すべきなのであろうか。そもそも若者が食べた食事は，迷い込んできた男に自分の境涯を語って聞かせた女が，自分をさらってきた白犬のことを「奇異シキ物ニ被取ラレテ」といい，さらに，食事の後，件の白犬は「内ニ入リテ女ト臥シヌ」という異常な雰囲気の中で供された食事なのである。かかる事態の中で供された「浄気」な食事は，「結構な」ものというにとどまらず，もっと別の意味をも包含しているのではなかろうか。

山奥の庵の主人が犬であり，犬に拐かされてその妻とされた女性から出された食事なのである。ここは，「結構な」の意味だけではなくて，「人間が食べるにふさわしい」という意味も含まれていると見るべきではないだろうか。さらにいうならば，犬の餌，畜生の食い物に対して当時の人々が持っていた一般的な通念に比して，意外に清潔であったということなのではないだろうか。(4)もっともこの家の女性は，「但シ乏キ事ハ不侍ヌ也」ともいっているので，食事の内容が豊かであったと見てよいかもしれない。しかし，外から帰ってきた犬を見て，「早，狗也ケリ，此ノ女ハ此ノ狗ノ妻也ケリ」と思った男の心中を考えあわせると，やはりここは「浄気」本来の意味である清浄さをもって解釈すべきあると考える。(5)

このような考え方が妥当であることを補強してくれるのが，『今昔物語集』巻三十一の第十四話「通四国辺地僧，行不知所被打成馬語」において用いられている「清気」である。

この物語は，四国の山中で道に迷った僧侶の一行が，たどり着いた家の主人である僧によって馬に変えられてしまったというものである。山の中で道に迷った僧侶達が，やっとたどり

着いた屋から出てきたのは,「年六十余許ナル僧也，形チ糸怖気也」と描写された僧であった。この主人である僧が，旅人である僧達にもってきたのが,「糸清気ナル食物」だったのである。旅の僧達は，恐ろしげな僧が屋から姿を現したとき,「鬼ニテモ神ニテモ，今ハ何カハセム」と，すてばちになってその家に泊まる決心をしたのである。

してみると，ここで出された食事は，ひょっとすると鬼の住処ではないのかと思われるほど深い山奥の家で供されるにしては「清気」だといっているのであって,「贅を尽くした」「品数の多い」食事と見るよりは，人間が食するに適した，清潔な印象を与える「粗末ならざる」食事と見るべきではなかろうか。犬の食事が不浄な物と考えられていたとすれば，鬼の食物も人間を始めとした生き物であり，これまた不浄の物とみなされていたのである。

以上述べた如く，ごく少数の例からではあるが,「清気」「浄気」の意味するところは，食物に関する限りでは，従来の解釈の上に「当初は汚い，不浄な物と予測されたのに，案に相違して清潔だ」という気持ちを加味すべきであると考えるにいたったのである。

但し，食物に対して「清気」という言葉が付けられる場合，食物が出される場が完全に「穢気」に汚染されてしまっていたのではかえって食物そのものが「触穢」で穢れてしまう。不浄な印象を与える場ではあっても，穢てはいないことも「清気」が付く際の大事な条件である。

ところで，食物については,「清気」「浄気」という語だけがつくわけではない。「旨い」「結構な」「贅を尽くした」という意味をあらわすためには，他の表現が用いられることもあるのである。

三　食物に付けられる「清気」以外の表現

食物，料理の状態を表すために用いられる表現を気づいたままにいくつか以下に示す。

(イ)　見レバ食物ドモサマザマニ多カリ。(巻十六—七)

(ロ)　長櫃ニ種々ノ飲食，菜等ヲ入レテ持チテ来タリ，見ルニ具ラヌ物ナシ。(巻十六—八)

(ハ)　其後，寂照，京ニシテ行キテ知識ヲ催ケルニ，一ノ家ニ至タリケルニ，呼ビ上テ畳ニ居ヘテ，美饌ヲ儲ケテ令食ムト為ルニ（巻十九—二)

(ニ)　食物持来タルヲ見レバ，魚・鳥ヲ艶ズ調ヘタリ。(巻二十六—八)

(ホ)　長櫃ヲ開タルヲ見レバ，微妙ノ食物共也ケル。(巻二十六—九)

(ヘ)　庵ノ前ニ郎等共居并テ，俎五六許并セテ，様々ノ魚・鳥を造リ極ク経営ス，（中略）其味艶ズ微妙クシテ（巻二十六—十八)

以上に紹介したのがすべてではないが,『今昔物語集』においては，食物の状態について，多様な表現が用いられていることが知られるのである。

例(イ)(ロ)は，品数が多いことを表しているが，これは，貧しい女性が夫となった男性やその従者達を接待する必要に迫られ，万事窮して仏の力にすがった結果，思わぬ所から豪華な食

物を得られたという霊験談であって，この場合は，食物の内容が豊富であったことを強調する必要があったので，「様々ニ多カリ」「見ルニ具ラヌ物ナシ」と食事の豪華さを示す表現が用いられたのである。

(ハ)は，かつて自分を捨てた男が僧となって乞食行をしていることを知った元の妻が，その僧を自宅に呼んで供養したという物語の中で用いられた例である。そのように因縁がある僧に対する供養であるので，「美饌（ウマキソナヘモノ）ヲ儲ケ」たのである。また，この物語の主人公である寂照が，出家する意志を確認するために行った雉の活き作りの場面においては，「此ノ鳥ヲ生乍ラ造テ食ハム，今少シ味ヤ美キト試ム」と味の良さを直接表現する語も見られる。

(ニ)は，飛驒国の山中で道に迷った僧侶が，滝の奥に隠されていた通路から見知らぬ土地に連れ込まれ，そこで土地の神に捧げる生け贄にされたという物語である。元来その土地ではある人の娘が生け贄にされることに決まっていたのであるが，娘の親が，他国から迷い込んできたこの僧侶を還俗させて娘の夫にし，娘の代わりに生け贄に仕立てようとしたのである。そこで，娘の両親は，毎日毎日ご馳走をたらふく僧侶に食わせて太らせようとしたのである。そのために，「魚・鳥ヲ艶（エモイハ）ズ調ヘ」たのである。従って，この場面においては，娘の両親にかかる下心があることを強調するためにも，すばらしく調理されたというにとどまらないで，魚や鳥などといった食材までもがもちだされたのであろう。

(ヘ)も事情は異なるが，かつて恩を被ったことのある僧侶に対する恩返しのための供応であるので，その料理のすばらしさを味と材料の両側面から強調しようとしてこのような表現になったのである。

以上に紹介した例は，いすれも調理の妙や材料の豊富なことを強調する必要があって，その場面にふさわしい表現方法が採られたのだといえる。「清気」という語では，以上の例のような，美味で，華美な，豪華な，贅を尽くした料理であることを言い表せなかったのである。また，食事が供される場が，「清気」「浄気」という語が用いられているような，汚らしくて本来ならばとてもまともな食事をすることがかなはないような所ではない。これも「清気」という語が用いられない理由の一つではなかろうか。

ところが，(ホ)の例は少し事情が異なる。というのは，この「微妙ノ食物」をもたらした人物というのが，実は正体が大蛇であって，大ムカデと戦うための助力を得ようとして，神通力を以て漁師たちを島に呼び寄せたという話の設定になっているからである。この食事が与えられたとき，漁師たちは男の正体についてはまだ知らされてはいなかったけれども，この男がただ者ではないことは既に承知していたのである。嵐に吹き寄せられて漂着した島が無人島であると思っていたところに，人間ならざる物の化身に出会ったのであるから，しかもその正体が大蛇（蛇が『今昔物語集』で扱われるとき，好意的に扱われることは少ない）というのであるから，彼がもたらした食事については，何はさておきまずそれが「清気」であ

ることを断っておく必要があったのではなかろうか。この点については，以下のように考えてみた。

「清気」に古典文学大系『今昔物語集』の解説以上の意味を付加しようとして，前に述べたように考えてみたのであるが，それは，いささかなりとも清浄感に疑念がわかざるをえないような舞台設定の中で，予想に反して清潔な食事が出されたときに「清気」「浄気」という語が使用されるのだということであった。犬畜生が家の主であって人間の女がその妻であるという異常な状況下にある家，あるいは，人跡未踏の奥深い山中の鬼の住処かと疑わせるような不気味な家で出された食事が，案に相違して「清気」なのであった。

(ホ)は，無人島で大蛇の化身が提供した食物ではあったが，この食物を取り巻く環境には，何らの不浄さもまた悪意も感じられないのである。漁師が流れ着いた島の有様は，「水ナド流出テ，生物ノ木ナドモ見エケ」る生活条件に恵まれた島であった。実際，ムカデ退治の後，漁師たちはこの島に移住してきて大いに繁栄し，「極メテ楽シキ島ニテゾ有ルナル」といわれるようになるのである。従って，無人島であっても，不浄でもないし鬼が出るような島でもなかったのである。

また，大蛇の化身として立ち現れた人物についても，「年廿余ハ有ムト見ユル男ノ糸清気ナル」と述べられていることからわかるように，相当に好感を持って描写されているのである。想像をたくましくすれば，ここに出現した大蛇の化身は，あるいは神の化身と考えられていたのかもしれないのである。もしそうであるならば，ことさらに「清気」などという語を使用する必要がなかったというのではなかろうか。(6)

四　浄くなければならない食物

以上に述べてきたように，『今昔物語集』の各説話において，食物に対して用いられる「清気」「浄気」という語は，見た目の豪華さや結構なという以上の意味が込められていたことが明らかになった。

「清気」（清げ）という語は，清らかさそのものではなくて，清い様子をしているということであり，完全に清浄無垢という状態までをも意味してはいないと思われる。それでは，完全に清浄な状態に保たれた食物について『今昔物語集』ではどのように表現しているのであろうか。

天狗を祭って不思議な技を行う法師に弟子入りして，その術の伝授を受けようとした若者は，「努々人ニ不令知ズシテ，堅固精進ヲ七日シテ，浄ク新キ桶一ヲ儲テ，交飯ヲ浄クシテ其桶ニ入テ」持ってくることを師匠から要求された。(7)他の説話でも，怪しげな術を伝授してもらおうとした男は，毎日水浴して身を清めることによって，要求された七日間の精進潔斎をなし終えたのである。(8)

天狗の術は不浄の外術であり(9)，それ自体は決して清らかであるとはいえない代物である。

しかし，常人の到底なしえない摩訶不思議な術を習得するに当たっては，堅固な精進潔斎が要求されたのである。[10]天狗を祭るための供物に当てられるべき交飯についても，厳格に清浄さが要求されたのである。そのような用途に供される交飯は，ただ単に「清気」であるだけでは許されないのである。かかる交飯は，所定の手続きに従って（たとえば，厳重に精進潔斎をした上で，注連縄を張った結界の中で特別に切り出した清浄な火を使って調理するなど）準備された物でなければならなかったのであろう。それ故，「清気」な桶ではなくして「浄ク新キ桶」が必要なのであり，「清気」な交飯ではなくして「交飯ヲ浄クシテ」持参せねばならないのである。すなわち，厳重に清浄さが要求されるときには，「清気」「浄気」てはまだまだ不十分なのである。

「きよし」には，「神聖である，清浄である」という。意味が本来ある。また，神聖なあるいは清浄な状態にすることを「きよむ」という。[11]上の説話における「清キ」は，このような宗教的な意味における用法である。「清気」「浄気」になると，「浄キ」よりも呪術的な効力が著しく劣るのである。「きよむ」という語も，「毎日ニ水ヲ浴テ浄マハル」の如く用いられている。「浄マハル」のであって，「清気」になるのではない。

「浄キ」桶は，「新キ」桶でなければならなかった。これは，見た目に清潔であるというだけてはだめなのであって，未だ何にも用いられたことがないという点において，如何なる穢にも触れたことがない完全な意味での清浄であるということが重視されたからであろう。既に一度たりとも使用されたことがある物は，たとえ其の表面を削ったとしても，「清気」な桶にはなりえても「浄キ」桶にはなりえないのである。

五　「清気」に関する留意事項

言葉は，生き続ける限り時間の経過とともに変化する。言葉の形もそうであるが，言葉のもつ意味内容も変化していく。

また，同時代であっても，特に前近代の階級社会においては，階級が異なれば使用する語彙も異なったであろうし，同じ語彙を使用したとしても，必ずしも同じ意味で用いられたとはいえないかもしれないのである。さらに，同一の語彙が使用される時と場合の違いによっても，意味内容が異なることもあったであろう。

一例として，「清気」が人物に対して用いられるとき，それが食物に対して用いられたと同じ意味で用いられているか否かについて検討してみよう。

> 男ならば廿から卅までの容貌端正なる者について，心持ちも麗しく，財産もあって頼もしく見える者の形容に用いられる。（中略）女ならば十七八から廿くらいの美女を指して用いられ，男を惹きつける力十分ある場合に用いられる。

上記は，前にも引用したことのある日本古典文学大系『今昔物語集』の補注の文章である。『今昔物語集』よりはもう少し上級の階級についての記述か多いと思われる『枕草子』では，

どのような人物を「きよげ」とみなしているのであろうか。以下『枕草子』における人物に対する「きよげ」の用例と，『今昔物語集』における人物に対する「清気」の用例を比較検討してみたい。

『枕草子』において，清少納言が人物に対して「きよげ」というときは，

性別に大きく関係があり，男性に圧倒的に多く二十八もあり(用例が——引用者注)，女性の美をたたえるよりも男性の持つ美に対して適していたようである。さらに男性の中でも年齢的に若い人に限られていたといっても過言ではなかろう。

ということである。(12)

ところが，『今昔物語集』における用例では，圧倒的に若い男性に対してのみ用いられている，とは言い難く，前節までに紹介した説話においても，むしろ女性に対してよく用いられているというべきである。両者のこのような違いが生じた原因は，『枕草子』の筆者が女性であったことを考えれば，筆者の主たる関心が若い魅力的な男性に向かい，同性には興味が全くなかったことに求められるのではなかろうか。もしそうであるならば，『枕草子』における「きよげ」の用いられ方は，『今昔物語集』におけるそれと全く同じだということになるのである。しかし，実際はそうではなかったと考えられるのである。やはり，階級や身分，その言葉が使用される環境に違いによって，「きよげ」のもつ意味も異なっていたと見られるのである。

「女ならば十七八から廿くらいの美女を指して用いられ，男を惹きつける力十分ある場合に用いられる」といわれるが，『今昔物語集』の各説話において女性に向かって「清気」という言葉が使われるときには，そんなにおとなしいものではない場合が多い。確かに，「男性を惹きつける力十分ある」には相違ないけれども，「僧，女ノ若クテ清気ナルヲ見ニ，忽ニ愛欲ノ心発テ，万ノ事忘レ」て女性を強姦したという説話をみると，(13)もっともっと激しいものを感じさせる言葉でもあったのである。もっとも，この僧は，被害者の女性に「僧ノ形チ糸清気也ケレバ」ということで厚く信頼されて，陰陽の祭りをするために二人シテ「深キ浄キ山」に入っていったのであるから，異性を性的に惹きつける魅力ある様子とばかりはいえないのであるが。

清少納言は，『枕草子』の中では「きよげ」を決してそのような意味では使用しない。異性に魅力を感じる点は同じかもしれないが，どこか雅やかさを保っているのである。

もう一つ『今昔物語集』と『枕草子』における「清気」「きよげ」の用例の違いを指摘しておくと，『枕草子』においては，食物に対して「きよげ」と表現する例がないようだという点である。

後宮に仕える女性は，食べ物などに関心をもつというはしたないことはなかったのだ，というわけではないだろう。少数の例なから，『枕草子』にも食物に対する言及は見られるのである。前に述べた如く，一見すると，清らかな食事が出される環境ではないにもかかわらず，

意外にも清らかな食物が出された場合に，しばしば「清気」と言う語が使われるのだとすると，清少納言の生活環境は清らかな食物が供されるのが当然なので，食物に対して「きよげ」と言わなかったのであろう。ちなみに，『源氏物語』においても，食物を「きよげ」と表現することはないようである。やはり物語の舞台が，宮廷と貴族の邸宅を中心としているからであろうと思われるのである。

『枕草子』も『源氏物語』もともに，作者が後宮に仕える女房であったというだけでなく，読者も同じ世界に住む人々が想定されていた。したがって，そのような作品に使用される言葉も階級性を考慮して解釈しなければならないのである。『今昔物語集』の各説話における登場人物は前二書よりも広い範囲の階層に属する。「清気」「きよげ」の用法の違いが生ずる所以である。

お　わ　り　に

以上，簡単ながら，『今昔物語集』における食物に対する「清気」「浄気」の用例を中心に検討することによって，平安時代の人間が「清い」とはどういう状態のものとしてとらえていたのか，考えてみた。用例が少ない上に，国文学・国語学においてなされた研究成果を吸収できず，いささか恣意的な解釈を施したきらいがあるかもしれないが，今回得られたささやかな成果をも含めて，今後中世法制史の中に占める「穢」の問題について考えていきたいと思う。

なお，未筆で大変失礼であるが，本学外国語学部の細谷直樹教授から，歌合わせの評語の中にもまれに「きよげ」が見られること，そしてそれは「雅」の意味で使用されているというご教示を賜った。また，貴族の世界，和歌の世界においては，『今昔物語集』的な「清気」「浄気」の用語は考えられないということも併せて教えられた。せっかくのご厚意を今回は生かせなかったが，今後不得手な和歌の世界にも目を配り，学恩に報いるよう努力したい。

註

(1)　『今昔物語集』巻二十九第三話「不被知人女盗人語」なお，『今昔物語集』は日本古典文学大系を用いた。

(2)　日本古典文学大系『今昔物語集』五534ページ。

(3)　勝俣鎮夫「家を焼く」（『中世の罪と罰』所収　1983年　東京大学出版会）　石井進「罪と祓」（『日本の社会史』第五巻「裁判と規範」所収　1987年　岩波書店）

(4)　『今昔物語集』巻十九第三話「内記慶滋保胤出家語」。慶滋保胤は，自分が下痢をして排泄したものを食べようとした犬に向かって，「諸ノ悪キ心ヲ仕ヒテ，善キ心ヲ不仕ザリシニ依リテ，此ク獣ノ身ヲ受ク，幣ク穢キ物ヲ要シテ伺ヒ給ブ也。我ガ父母ト繰返シ成リ坐タル身ニ，此ノ不浄ノ物ヲ令食進ラム，極メテ忝ナキ事也」と述べている。

犬という物は，人間の排泄物をはじめとして不浄の物を食べる物なのだというのが当時の人々の共通した認識であった。したがって，「犬の家へ行って出される食事が清潔であるはずがない」と思っていたのに，

案に相違して「浄気」な食物が供されたのだということであろう。

(5) 『日本国語大辞典』(小学館発行) によれば,「きよげ」は,「けがれなく美しく見えるさる。さっぱりとしているさま。特に平安時代では美一般をあらわす語として,今の『美しい』とほぼ同文に用いられた」とある。

この説話において用いられた「浄気」は美しいという意味ではもちろんないが,食べ物の見た目の清潔さ,さっぱりとしているさまをあらわしていると考えられる。

(6) 京都の北山で犬の妻にされていた女性についても,「若キ女ノ年廿余許ニテ糸清気ナル」と表現されていたが,女を取り巻く情況は「清気」どころか極めて異常なものであった。また件の犬は,実は神だったのではないかとも結末で推測されているが,それはこの話を聞いた人々の噂に過ぎない。この説話の場合は,舞台が当時人間が住むべき所ではなく異類が住むところと一般に考えられていた深山であり,かつこの女性と犬との関係が古代においては罪の一つに数えられていた「畜姦罪」(『延喜式』巻八祝詞六月大祓) 思い起こさせるものであったので,「清気」な食事が出されたことに意外性を感じたのかもしれない。

(7) 『今昔物語集』巻二十の第九話「祭天狗法師,擬男習此術語」

(8) 『今昔物語集』巻二十の第十話「陽成院御代滝口金使行語」なお,この説話においては,特に食物の清浄さが問題にはなっていない。

(9) 『今昔物語集』においては,天狗は仏敵であり,その体臭は得も言われぬほど臭いものとされている。(仏法部に収められた天狗が登場する諸説話参照)

(10) 邪悪な外術が不浄な物を忌むことは,中国においても同様である。清代前期になった『聊斎志異』では外道を破るのに血や犬の尿などが用いられた話が散見される。『平妖伝』では,反乱を起こした妖術使いたちの術を破ったのは,官軍が使用した大量の糞尿であった。我が国でも,外術が不浄を忌むという考えは,道教的なものから受けたのではなかろうか。

(11) 『時代別国語大辞典　上代編』

(12) 谷口典子「枕草子における『きよし』『きよらなり』について」(『平安文学研究』第四十四輯　平安文学研究会　1970年)

(13) 『今昔物語集』巻二十六の第二十一話「修行者,行人家祓女主死語」